

目次

プロローグ 白衣の向こう側

登場人物紹介

第一話 堕ちた女医の背徳診察室

第二話 聖女の墮落

短編 早朝のアマゾネス

濃密なキスの余韻が残る中、旦那様は確信を深めていました――目の前の女は、気高いエリート女医などではなく、自分に服従することを心の底から渴望している極上の淫乱ドスケベ女だと。これほどまでに溺れさせた今、何を命じようと拒絶などされるはずがない。そう確信した瞬間、旦那様の中で冷徹な支配欲のギアが限界まで急加速していききました。

「先生、診察の続きです。……四つん這いになって、こちらにお尻を突き出してください♠」

その言葉は、麗華にとって「医師」としての尊厳を完全に葬り去る命令でした。しかし、今の彼女には、その命令こそが唯一の救いのように響いたのです。

「……ッ、はい……っ。……かしこまりました……」

彼女は涙で濡れた瞳を伏せ、膝についてベッドの上で姿勢を崩しました。白衣の裾が乱れ、理知的だった女医の姿は、今はただの欲に溺れた牝へと成り果てています。彼女はゆっくりと四つん這いになると、腰を高く持ち上げ、旦那様の方へその豊満な臀部を突き出しました。

呼吸は荒く、白衣の合わせ目からは、無防備に晒された柔肌が覗いています。彼女は恥ずかしさで首筋まで真っ赤に染め上げ、背中を激しく震わせながら、旦那様からのさらなる「診察」を待ちわびるように、あえぎ声を漏らしました。

「あぁっ……っ、先生……もう、おかしくなりそう……っ。早く……っ、私を……っ、好きに……っしてください……っ♡」

彼女は背後で視線を感じるたび、恥辱と快感で腰をびくりと揺らします。完璧主義者だった女医の誇りは、今やこの歪んだ快樂の前に完膚なきまでに叩き折られました。

旦那様はゆっくりと膝をつき、四つん這いになった麗華の背後に回りました。彼女の突き出された臀部に顔を近づけ、白衣の隙間から漂う、微かな石鹸の香りと混ざり合った、女特有の甘く生々しい匂いを深く吸い込みます。

「クンクン……」

旦那様が何度も鼻を鳴らして匂いを嗅ぐたび、麗華の全身が電流に打たれたかのように激しく戦慄しました。

「あぁっ……！……ひっ、あぁぁ……ッ!!」

彼女は恥ずかしさのあまり、顔を枕に押し付けて情けない声を漏らしします。これまで清潔で無菌に近い環境で生きてきた女医にとって、一番見せてはいけない場所を、あろうことか「嗅がれる」という行為は、極限の屈辱と同時に、言いようのない背德的な快感をもたらしていました。

「や、やだ……っ、そんな……っ、匂いなんて……っ、汚いの……っ、お願い、そんなに……っ!」

彼女は腰を小刻みに震わせ、旦那様の顔が近づくたびに、期待と恐怖で臀部をぴくりと跳ね上げます。旦那様の鼻息が、薄いパンティ越しに敏感な場所に触れるたび、彼女の身体は熱を帯び、内側からじわりと熱いものが滲み出しているのが分かります。

「もっ……っ、もっ……っ。私の……っ、こんな……ッ、恥ずかしいところを……っ、全部、旦那様のものにして……っ」

彼女はもはや、自分が何のために病院にいるのか、誰であるのかすら忘れてかけています。旦那様の顔が、パンティ越しにさらに深く、彼女の急所に押し当てられました。

旦那様の手が、麗華の白衣をさらにたくし上げ、その細い腰をしつかりと掴みました。旦那様が迷いなくパンティの縁に指をかけ、横へとずらした瞬間――麗華の背中が、まるで悲鳴を上げるように大きく弓なりに反り返りました。

「あ、ああああっ……!! や、やだッ、そこは……っ!!」

羞恥心で限界を迎えた彼女の喘ぎ声が、病室に高く響き渡ります。旦那様の温かい吐息が、露わになった無防備な秘所に直接触れ、旦那様の唇がそこへ吸い付くように押し当てられました。

「ちゅっ……ぷりゅっ……♥」

「ひうつ!! ああああッ……ッ!!」

麗華は崩れ落ちるように膝を閉じようとはしますが、旦那様の力強い手によって腰を固定され、逃げ場を失います。突然の濃厚な刺激に、彼女の腰はガクガクと激しく震え、瞳孔は大きく開き、思考は完全に白濁しました。

これまで誰にも触れさせず、清廉潔白を保ってきた場所が、今、目の前の旦那様の唇によって、貪るように汚されていきます。

「ふあ……っ、んんっ!……だめ、そんなっ、音……っ、聞こえる……っ! ああ、っ、ああ……ッ!」

彼女は自分から発せられる卑猥な音と、旦那様の温もりに脳を焼き尽くされ、羞恥と快感の極致で涙を流しながらも、もっと、もっとと腰を旦那様の顔に擦り付けました。

医師のプライドが、旦那様の舌によって愛撫されるたびに、跡形もなく消え去っていきます。彼女はもう、このままここで全てを壊されても構わな

い、という壊れた人形のような表情で、旦那様のされるがままに果てようとしています。

「じゃあ、舐めるよ……。」

旦那様が迷うことなく、その禁断の果実へ容赦なく舌を這わせました。

「ああッ！……あッ、ああああーッ!!」

麗華の喉から、理性をかなぐり捨てた獣のような絶叫が漏れ出します。旦那様の舌が秘所のひだをかき分け、奥深くを容赦なく責め立てるたびに、彼女の身体は激しく跳ね上がりました。

「ちゅうちゅう……べろべろ……ッ！」

旦那様が粘りつくような音を立てて熱い舌を絡め取り、さらにその奥へとしつこくレロレロと愛撫を繰り返すと、彼女の腰は制御を失ったかのようにガクガクと痙攣し、シートを力任せに掴み上げます。

「やあッ、そんなッ……っ！そこ……ッ、ダメエッ！……ひぐっ、ああッ、もつと……っ、もつとおおッ!!」

彼女の白衣からこぼれ落ちる蜜が、旦那様の顎を伝い、シートをじつとりと濡らしていきます。あんなに気高く、冷静だった麗華先生が、今や旦那様の舌先ひとつでここまで泥のように溶かされ、淫らな声を出し続けているのです。

彼女は視線を彷徨わせ、涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにしながら、旦那様の愛撫に抗うことなく、むしろ自分からその快感を貪るように腰をすり寄せています。

「ぶちゅっ……れろれろ……ッ！」

追い打ちをかけるような旦那様の容赦ない奉仕に、彼女の意識は完全に蕩けきり、指先は白く変色するほど強くシーツを掴んでいます。

「あああッ、だめえ……ッ、いっちゃう……っ、先生の……っ、こんな……っ、壊れちゃう……っ!!」

絶頂の崖っぷちで、彼女は片腕を無理やり背後へと回し、自分を貪る旦那様の頭をしっかりと抱き寄せました。逃げることもなにもう頭になく、自らの快感を彼にすべて捧げるように、その背中を甘く弓なりに反らせます。

旦那様は麗華の絶叫を耳にしながら、彼女の秘所をさらに深く、執拗に責め立てました。これまで「純潔」という名の鎧を纏っていた女医の、あまりにも甘く、そして抗えない誘惑に満ちた蜜の味。旦那様はそのすべてを味わい尽くすかのように、貪欲に舌を動かし続けます。

「ああっ……ああああッ!!……ひぐッ、あ、あ、そんな……ッ!!」

旦那様の欲望がダイレクトに伝わり、麗華の身体はもはや自分の意志とは無関係に、大きく跳ね上がり続けています。旦那様が「もっとと激しく」と唇を押し当て、力強く吸い付くたび、彼女の深奥がギュッ、ギュッと激しく脈打ち、熱い奔流を旦那様の口内へと溢れさせました。

「ちゅうッ、ぶるッ、ちゅちゅっ……!!」

「ひううっ!!……ああっ、ああああッ、死んじやうっ……!……ああっ、ああっ、そこ、っ、ダメエええッ!!」

獣のような咆哮にも似たあえぎ声が、病室に木霊します。彼女の理知的な眼鏡は遠い床の果てに投げ出され、彼女の瞳は白く濁り、快感のあまり焦点すら結べていません。

旦那様がペロペロと執拗にクリトリスを弄り回し、ブチュリという生々しい音を立てて激しく吸い上げると、麗華の腰は限界を超えて弓なりに反り、彼女の秘所からはとめどなく蜜が溢れ出て、旦那様の顔を濡らしました。

「ああつ、あああ……っ！……っ、先生……もう、っ、ダメえ……ッ!!

……旦那様の……っ、旦那様の……っ、もう、どうにでも、してえええッ!!」

彼女は快感のあまり、自分の白衣をさらに引き裂かんばかりの勢いで掴み、旦那様の頭を必死に押し付けます。医師としてのプライドも、社会的な地位も、何もかもがこの愛撫によって溶かされ、彼女は完全に旦那様の悦楽の虜となりました。

旦那様は麗華の絶頂の波が押し寄せ、彼女が抗いがたい快楽に溺れているその隙を逃さず、さらなる蹂躪を開始しました。

舌で蜜に濡れたクリトリスを執拗に吸い上げ、激しく愛撫しながら、旦那様は空いた片手を背後に回しました。たつぷりとした唾液を親指に絡ませ、彼女が快感で痙攣させているアナルへと、躊躇いなく指先を押し当てます。

ズボッ……

「ひゃうッ!? あ、ああああ——ッ!!」

あまりの衝撃に、麗華の喉から悲鳴にも似た絶叫が突き抜けます。今まで経験したことのない、後ろの禁断の場所への侵入。しかも、前からは舌で責められ、後ろからは指で異物をねじ込まれるという、逃げ場のない快楽の挟み撃ち。

「あ、ああ……ッ！は、入って……っ、そこ、っ、ダメエ……ッ！お尻、っ、おかしくなるううッ!!」

彼女の腰がビクンビクンと激しく跳ね上がり、アナルが旦那様の指を締め付けます。前方の秘所からは、さらなる大量の愛液が噴水のように溢れ出し、旦那様の顔をびしょ濡れにしました。

指が奥へと滑り込むたび、彼女の内壁が熱く脈打ち、旦那様の指を淫らに絡め取ります。彼女の瞳はもう焦点が完全に定まらず、白目を剥きそうなほど快楽に塗りつぶされていました。

「あぁっ、ああぁ……ッ！前も、後ろも……っ、先生に……っ、いじられてる……っ！壊れる、っ、壊れちゃうううッ!!」

理性の欠片も残っていない彼女の身体は、完全に旦那様の指と舌の支配下にありました。この背德的な攻めに、彼女はもう絶頂の淵で、ただ「もっと壊してほしい」と懇願するだけの廃人同然の状態です。

さあ旦那様、このまま前後の刺激で彼女を狂乱の果てまで導きますか？それとも、指の動きをさらに過激にして、彼女の奥の奥まで蹂躞しますか？